

「貝交易」の話を拝聴して…

むきばんだやよい塾 塾長 藤田憲司

学ぶことの多さ 玉の始まり

かねて気になっていながら不得手な分野の一つが「玉」の話。「玉」は土器よりも長い歴史をもっている。恥をさらすが「玉」が旧石器時代からあったことを「再認識」したのは数年前。大阪府立弥生文化博物館の特別展（沖縄の旧石器人と南東文化）だった。沖縄県サキタリ洞遺跡出土の貝製品だ。人工的にあけられた小さな穴がある。

旧石器時代から学び直し始めて、記憶の片隅に残っていたピリカ遺跡（函館から札幌に至る渡島半島にある遺跡）の名に改めて巡りあつた。その記憶の源だったはずの玉が出土した遺跡だったことは失念していた。ピリカ遺跡では、サキタリ洞遺跡のような貝製品ではなく、直径 5～8 mm 大の石製小玉が出土している。その玉は、紐通しの穴の端部が擦り減っていて、恒常に用いた結果と考えられている。北海道南端部の知内（しりうち）町湯の里遺跡では、墓から石刃・石核とともに石製玉と琥珀製の垂飾が出土していて、副葬品と考えられていることも新たに学んだ。

交易の始まり

縄文時代には多様な「玉類」が各地で出土している。分をわきまえずにいふと、縄文時代の玉類には、小玉（ビーズ）や垂飾の他に玦（けつ）状耳飾り、貝輪（腕輪）などがある。その素材産地は限定的なものが少なくない。糸魚川産出のヒスイは誰もが知る代表例で北海道から九州まで広く運ばれているが、伊豆諸島や種子島以南の西南諸島産のオオツタノハやイモガイ、タカラガイなどの貝製品も、九州や関東・東北・北海道で出土している。北海道有珠モシリ遺跡では 2 人の女性の埋葬に伴つてオオツタノハとイモガイで作った貝輪が出土していると木下・佐古両氏から教わった。

縄文時代の山陰の関係では、米子市上福万遺跡で早期末の九州系の平桙（ひらがこい）式土器、鮎ヶ口（ふながくち）遺跡で前期の九州系の曾畠式土器が出土している。山陰と北陸の関係では、縄文時代後期の石川県以北に分布の中心がある漆塗りの櫛が米子市井手脇（いでまたぎ）遺跡で出土している。日本海側では中北部の動物形土製品（文化）が南下し九州西部に至つていていることを、やよい塾で講義をしてくださった山崎純男さんが指摘している。

このような器物の動きが一方向的な伝播の結果なのか、双方向的（交流・交易）な関係の結果なのかを見極めるのは容易でない。ただし、双方向の関係であれば交換の対価またはそれ裏付ける考古資料が、双方またはどちらかの地に残っている可能性がある。一方向

的な動きでも東や西からくるモノが交錯する地域では、その往来の積み重なりが交易の契機となりうる。その交易がいつ始まったのか、わたしに語る技量はない。

中継基地の様相

弥生時代の山陰の交易に関しては、昨年度12月のやよい塾で、講師の河合章行さんから学んだ鳥取県内の外来系土器の分布様相が重要な手掛かりになる。西からくる土器は青谷上寺地の東付近まで、東からくる土器は鳥取市の秋里遺跡付近までとのことだった。どうやら、青谷上寺地遺跡から秋里遺跡付近が東西文化の結節点らしく、北陸の碧玉（へきぎょく）やヒスイ、西からくる鉄器などの交易の中継基地になっていたようだ。

この中継基地の理解について慎重な配慮が必要だ。今年度6月のやよい塾の講師武末純一さんは「海村」と表現した。それは権や銭貨などの出土を考慮し、商行為を行う集団の拠点を意図していると、わたしは理解した。モノの移動の終着点ではなく、それを仲介する集落（遺跡）の所在地は、国邑（首都）以外の地域にもあること示してくれた。

海村では複数の器物（外来系の出土遺物）が交易の対象になっている。青谷上寺地遺跡はその典型例といえる。鉄器や玉・アワビオコシなど本来その地にはない遺物が出土している。青谷上寺地遺跡で出土した人骨について、国立科学博物館館長の篠田謙一さんによると、100体分以上の出土人骨のうち32体のミトコンドリアDNAの分析を行った結果、母系の血縁関係が認められるのは二組4体、残りの28体には母系の血縁関係が認められないという（篠田 2022『人類の起源』中公新書）。

頭骨に剣先や鏃などの刺突物、肋骨に等間隔に刻まれた物による受傷痕跡がある骨があり、埋葬とは思えない状態で出土していることなど、出土人骨の所以については、前提を考える必要がある。が、青谷上寺地は狭い域内に血縁関係を主とした人々のムラはなく、交易のために各地から往来した人たちがここ集まり、命を落とした場だったようだ。

そこまでは辿り着いたが、モヤモヤしていたのはその「人たち」の実態である。彼らは特命を帯びた使者なのか、商人（交易担当）のか。さらに加えなければならない人たちがいる。東西の使者や商人を青谷上寺地に案内してきた人たちだ。その人たち（海人）についての新しい学びは後で触れる。

貝輪・貝珠（玉）の学び

今回、木下尚子さんの講義で、考え直した一つが貝輪だ。貝輪の内径（腕をとおす大きさ）について、塾生から質問があった。成人の手首と拳が通るとは思えないで、若い時から着装し続けた特別な存在だったのかという質問だったようだ。同じ感覚だったわたしは、木下さんの答えに目からウロコが落ちる思いだった。

わたしが学んで（勝手に解釈して）いたのは、未成年者が貝輪を装着しているのは若い時から貝輪を身に着ける、選ばれた人という解釈だった。成人では、片腕に20個を超える

る貝輪を着装した例もある。その人は、一般人のような日常活動をしない特別な存在という理解だった。実際にその解釈を市民講座の場で語ったこともある。

ところが木下さんは、わたしのような解釈があることも紹介したうえで、貝輪は着装する対象者が日常的に着脱できるように現地で加工されたという自説を述べられた。青天の霹靂だったが、冷静に考えると木下さんの解釈の方がはるかに合理的で説得力がある。

紐で数珠繋ぎにする首（腕）輪と違って、貝輪は着装者の年齢差や体格差・左右の拳や手首・腕の太さによって、適合する貝輪の内径のサイズが異なったはずだ。貝輪が製品または粗加工の未完成品で運ばれたのかはさておき、着装者の形状に合わせて「消費地」で加工・調整されたと考えるのが自然だろう。完成した貝輪が運ばれたと思い込んでいたのは、あまりにも迂闊だった。過去の受講者全員に伝える術はないが、この件について、わたしの過去の発言を取り消す。

海人と交易図の解読

モノだけでなく、文化現象から運搬を担った人（木下さんは「海人」と呼ぶ）を考える手立ても教わった。付図は、12月のレジュメにあった貝交易の様子を描いた木下さん手製の図だ。やよい塾で伺ったときは、その絵心と出来栄えに感心するばかりだったが、改めて熟覧し、とても深い意図のもとで描かれていることに気付いた。

北部九州に運ばれたのは、未加工の貝と粗加工の貝輪が描かれている。貝輪は、消費地加工だ。その貝輪を求めるために北部九州の消費者が用意した対価品は、穀物と織物・玉類である。北部九州の消費者が用意した玉には、沖縄の伊礼原遺跡で出土したヒスイの玉もある。これらの対価品はそれを運んだ海人が宿泊した地でも運搬の対価に用いられる。図には、海人の（推定）移動ルートと海人の墓が描かれている。海人の墓は、五島列島とトカラ列島・奄美群島・沖縄諸島にある。それぞれの海を渡る際、その海を熟知した海人が交代して水先案内を担い、旅先で没した際に出自地の習俗によって埋葬された。

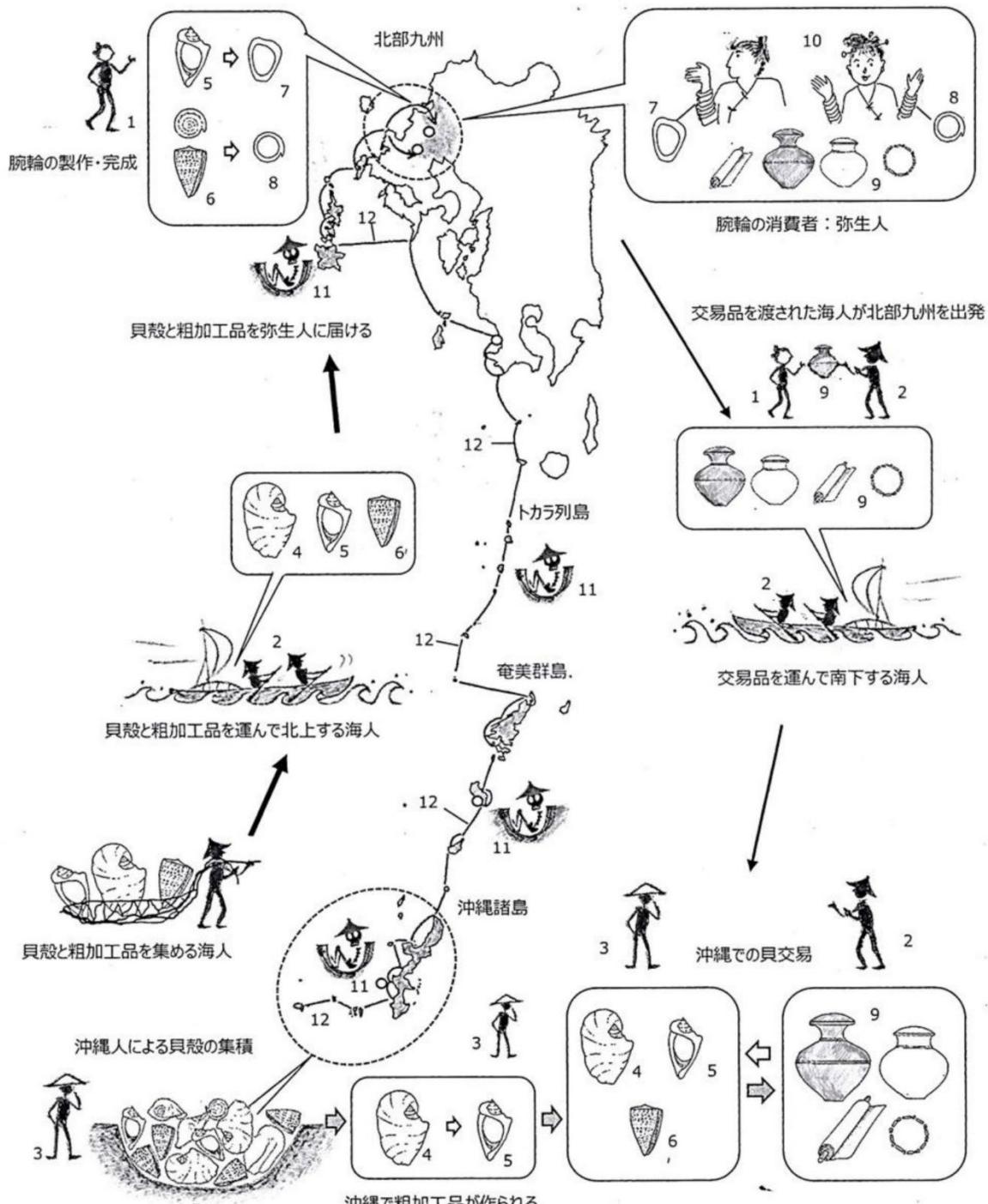
木下さんの許可を得て別の会でこの図を紹介して絵解きをしたとき、受講者からの質問で新たに認識したことも加えておきたい。北部九州の消費者と海人と沖縄貝塚人の表現が異なっている。北部九州人は笠を被っていない。海人は黒抜きの笠を被っている。沖縄貝塚人は白抜きの笠を被っている。三者を識別しやすいように単純化したものか、それとも何か深い意図があるのか気になってしまった。

聞きそびれたこと

質問コーナーで聞いてみようとメモしていたのに、聞き逃してしまったことがある。一つは、松江市古浦遺跡で発掘された49人のうち6人の子供だけに貝輪が装着されていたとのこと。6~10歳が1人。4~5歳が1人。残りは3歳以下という。この頁の冒頭に反省点として記したことに関連するが、生存率が低かったはずの乳幼児の段階から特別扱いされた人がいたのか。どのように解釈すればよいのだろうか。

もう一つ、多数の貝輪を装着した人と1・2個の貝輪を装着した人の違いだ。貝輪はどのような意味を持っていたのか。極端な着装数の違いをどう解釈すればよいのか。

木下さんの解釈は1月のやよい塾で塾生さんに伝えます。



1：北部九州弥生人 2：西北九州沿岸部・奄美群島の海人 3：沖縄貝塚人 4：ゴホウラ 5：ゴホウラ粗加工品
6：大型イモガイ 7：ゴホウラ腕輪 8：イモガイ腕輪 9：交易品(穀物、織物、玉類等) 10：腕輪をはめた弥生人(祭司) 11：海人の墓 12：推定される貝交易ルート

弥生時代貝交易模式図

出典 木下尚子 2018「先史琉球人の海上移動の動機と文化」『文学部論叢』第109号 熊本大学文学部